

女子学生の自己についての語り

- 自分を色に例える試みから^{注1} -

清泉女学院大学 向田 久美子

The way Japanese female college students describe themselves

Seisen Jogakuin College MUKAIDA, Kumiko

本研究では、自分を色に例え、その理由を述べるという課題から、女子学生の自己についての語りの特徴について検討した。その結果、色では白やピンクが多く選択されていた。色の選択理由を分類すると、自分の「個性」とのつながりに言及するものが最も多く、続いて「好きだから」「人に言われるから」という理由が多くなっていた。個性の記述の仕方に着目すると、「具体的特徴」に加え、「多面性・可変性」や「はっきりしない個性」への言及が多くなっていた。語り口の特徴として、関係志向性とあいまいさの2点が指摘された。語りの背景にあると思われる文化的スクリプトや、発達段階との関係について議論を行った。

【キー・ワード】女子学生，自己，語り，文化的スクリプト

This study explored how female college students described themselves. They were asked to liken themselves to a certain color and describe the reason why they chose that color. White and pink were found to be the most popular colors. As for the reason, the most referred to one was that the color they had chosen reminded themselves of some aspects of their personality. The second one was that they simply liked the color and often got dressed in it. The third reason was that people had told them that they have an image of that color. Some mentioned concrete personality traits, others their diversity, and some used vague terms to describe themselves. Cultural scripts and the developmental stage of the participants were discussed as factors to affect their self-description.

【Key Words】Female college students, Self-description, Cultural script

問 題

人がどのような自己概念や自己イメージをもっているかについては、嚆矢となる James (1892) の論考以来、膨大な研究が積み重ねられている(e.g. 梶田, 1980; Shavelson, Hubner, & Stanton, 1976; 山本・松井・山成, 1982)。自己概念の測定方法としてよく用いられるのは、特性形容詞の選択や評定(長島・藤原・原野・斎藤・堀, 1967; Schoeneman, 1981)、“私は・・・”で始まる20の文章を

完成させる 20 答法 (Montemayor & Eisen, 1977) などである。

こうした自己概念や自己評価をめぐるには、さまざまな文化差があることが見出されている。先行研究によれば、日本人を含むアジア系の人々の自己概念は状況依存的であり (Cousins, 1989; Markus & Kitayama, 1991), 社会的カテゴリーへの言及が多く (Triandis, 1989), 自己批判的な傾向があるという (Diener & Diener, 1995; Heine, Takata, & Lehman, 2000; 唐澤, 2001)。自分の過去や将来に対する自由作文の分析を行った真島・東 (1998), 向田・東 (2005) は、アメリカ人や中国人に比べて日本人の記述があいまいであることを見出している。

自己研究の方法として、近年は物語的アプローチも用いられるようになってきている (榎本, 1999; やまだ, 2000)。このアプローチでは、自己や人生について語られた物語を分析することにより、個人が日常の経験をどのように組織化し、意味づけているかを明らかにしようとする。個人の語る物語は、暗黙のうちに文化の影響を受けており (Bruner, 1990; やまだ, 2000), 自己や人生についてどのように語るべきか、どのように語るのが普通か、というそれぞれの文化圏に蓄積されたスクリプトを反映していると思われる (東, 1999)。

本研究は、女子学生が自己について語った内容を分析し、そこにどのような文化的特徴が見られるかを探索的に検討しようとするものである。具体的には、自分を色に例えてもらい、その理由として記述された内容を分析の対象とした。このような方法をとったのは、“あなたはどのような人ですか” など、自己について直接的に尋ねるやり方 (e.g. McGuire, 1984) では、属性や性格特性の羅列にとどまる可能性が高く、日常的な語りの特徴を明らかにすることが難しいように思われたからである。そこで、本研究では、自分を何かに例えるという投影的な手法を用いて尋ねることにした。また、例える対象を色としたのは、生活の中でなじみ深く、調査協力者に予備知識がなくても回答することが可能だと判断されたからである。

方 法

1. 調査協力者

清泉女学院大学の学生 73 名と東京女子大学の学生 83 名の計 156 名 (平均年齢 20.0 歳)。

2. 手続き

2005 年 10 月に、授業時間を利用して質問紙調査を行った。「あなたを色に例えると何色になりますか。またその理由についてお聞かせ下さい。」という質問に対し、自由記述で回答を得た。所要時間は 5 分程度であった。

結 果

1. 色の種類

表 1 に示すのが、調査協力者が選択した色の種類である。最も多かったのが、「白・透明」と「ピンク」であり、それぞれ 21 名 (13.5%) が選択していた。次に多かったのが、「水色」「青」「赤」「オ

レンジ」「緑」であり、それぞれ 11 名 (7.1%) が選択していた。「複数の色」「その他」を除くと、全部で 16 種類の色が挙げられた。

表 1 選択された色の種類と内訳

種類	度数	%	内 訳
白・透明	21	13.5	白17/白か透明1/無色1/透明1/無色透明1
ベージュ	8	5.1	ベージュ6/クリーム色2
水色	11	7.1	水色8/薄い水色1/空色2
青	11	7.1	青9/パステルの青1/青のグラデーション1
紫	6	3.8	紫4/青紫2
赤	11	7.1	赤8/濃い赤1/ワインレッド1/エンジ色1
ピンク	21	13.5	ピンク15/薄いピンク3/薄い紫の入ったピンク1/赤に近いピンク1/濃い目のピンク1
オレンジ	11	7.1	オレンジ11
緑	11	7.1	緑4/グリーン2/深緑2/濃い緑1/黄緑1/若草色1
黄色	6	3.8	黄色5/薄い黄色1
黒	7	4.5	黒7
灰色	8	5.1	灰色4/グレー3/ねずみ色1
茶	4	2.6	茶4
紺	4	2.6	紺4
虹色	4	2.6	虹色3/カラフル1
金・銀	3	1.9	金1/銀2
複数の色	6	3.8	紫・黒・茶1/黒・白・紫1/青・黄1/黒か緑か白1/黄土色・灰色1/オレンジ、黄色、水色1
その他	2	1.3	暖色系1/薄い色1

2. 理由の内容分析

次に、その色を選んだ理由について分析を行った。一人で複数の理由を書いている場合は、別々に分けた上で分析した。KJ 法により、各個人の回答を共通する内容ごとにまとめたところ、表 2 のような結果となった。なお、分析にあたったのは筆者 1 名である。

表 2 色の選択理由

理 由	度数	%	記 述 例
好き・身につける	48	30.8	自分の好きな色だから、よく身につけているから
人から言われる	23	14.7	よく人に言われるから
個性	121	77.6	
* (具体的特徴	48)	(30.8)	割と温厚だと思う、おしゃべりだから
(はっきりした個性	6)	(3.8)	はっきりと主張すべきときには主張する
(はっきりしない個性	25)	(16.0)	あまりはっきりしていない、目立たない
(中庸	6)	(3.8)	周囲の影響も受けるが、根は頑固
(多面性・可変性	33)	(21.2)	いろいろな面がある、周囲に流されやすい
(外見とのギャップ	3)	(1.9)	一見おとなしそうに見えるが、実は・・・
その他	5	8.9	なんとなく

* ()内は「個性」の下位分類を示す。

選択理由の中で最も多かったのが、自分の「個性」への言及であり、全体の 8 割近くを占めていた。

このカテゴリーの回答例は多岐に渡ったため、下位分類ごとに整理し直した（結果については後述する）。次に多かったのが、「ピンクが好き」、「黒い服が多いから」といった回答であり、「好き・身につける」というカテゴリーにまとめられた。全体の 3 割がこのカテゴリーに言及していた。「人から言われる」というカテゴリーの回答例としては、「よくボーイッシュと言われるので」、「人から似合う色だと言われるので」などがあり、全体の 14.7%が言及していた。

3. 個性の記述の仕方

選択理由で最も多かった「個性」の記述を、書かれている内容ごとに整理し直した。その結果、「具体的特徴」に言及するもの、「はっきりした個性」に言及するもの、「はっきりしない個性」に言及するもの、と の中間にあることを示す「中庸」、「多面性・可変性」に言及するもの、「外見とのギャップ」に言及するもの、に分けられた。

このうち、最も多くなっていたのが、「具体的特徴」に関するものであり、全体の 3 割を占めていた。続いて、「多面性・可変性」(21.2%)と、「はっきりしない個性」(16.0%)となっていた。以下、これらについて詳しく見ていく。記述例に引いた下線は、いずれも筆者によるものである。

3-1. 具体的特徴への言及

「具体的特徴」とは、自分の個性を具体的に記述しているものである。全 48 件のうち、7 例を挙げる。

<具体的特徴の記述例>

- ・ ひどく熱しやすく、熱が入るとそのことばかりしてしまうから（赤）
- ・ 何事も受け入れる素直な性格だと思うから（白）
- ・ なんとなくぼやんとしているので（ピンク）
- ・ 内向的でそんなに明るいタイプではないから（紺色）
- ・ いつもだいたいテンションが高いから（黄色）
- ・ 紫は複雑だから、自分っぽいと思う（紫）
- ・ ひまわりが好きだから（オレンジ）

3-2. はっきりした個性への言及

「はっきりした個性」とは、まわりに左右されない強い個性をもっていることに言及したものである。全 6 件のうち、4 例を挙げる。例えられる色としては、黒や赤が多かった。

<はっきりした個性の記述例>

- ・ はっきりと自己主張すべきときには自己主張するので、赤色のようにはっきりと目立つような気がする（赤）
- ・ 興味のあるもの、ないものがはっきりしていて、比較的冷静なところがあるから（黒）
- ・ 自分の好きなことには他人に関係なく行動したりするから（赤）
- ・ まわりに関係なく、どんな色とまじってもあまりかわらないから（黒）

3-3. はっきりしない個性への言及

「はっきりしない個性」とは、強い個性がなく、自分が目立たない存在であることに言及したものである。「はっきりした個性」の約4倍に相当する、25件の言及があった。記述の仕方によって大まかに分けると、“はっきりしない自分”と“目立たない自分”に分けられた。全24件のうち、それぞれの代表的な例を挙げる。はっきりしない個性に言及する人は、灰色やベージュなどの中間色や、茶色などの地味な色を挙げる傾向にあった。

< “はっきりしない自分”の記述例 >

- ・ 迷うことが多くて、あまりはっきりしない感じの色だと思ったから（灰色）
- ・ あまり「これ～！」という強い人間ではないため、はっきりした「赤」などの色ではなく……。あえて「オレンジ」にしてみました（オレンジ）
- ・ 自己主張が強くないから、はっきりしてないから（薄い色）
- ・ 白黒ははっきりせず中途半端だから（グレー）
- ・ どっちつかずだから。黒でもないし、白でもない（灰色）
- ・ 性格は派手でもなく、地味でもないと思うので、クリーム色にしました（クリーム色）
- ・ 暗くもなく明るすぎることもない色の感じが自分ばいと思うから（ベージュ）

< “目立たない自分”の記述例 >

- ・ 主張しない地味な感じ。ぼやけた感じ（ベージュ）
- ・ あまり印象にないけど、自然な感じで目立たない色だから（ベージュ）
- ・ どこにいてもそんなに目立つこともない（黄色）
- ・ 決して目立とうとしない感じにいる（茶）
- ・ 地味な色で他の色のじゃまにならないから（茶）

3-4. 中庸への言及

「中庸」は個性の強さと周囲とのなじみやすさの双方に言及したものである。全6件のうち、3例を挙げる。

< 中庸の記述例 >

- ・ 自分の個性はそれなりにあるけど、あまり慣れない人の中ではまわりの人に自分を合わせがち（ベージュ）
- ・ 影響を受けて他の色に染まることもあるが、根が頑固なので他の色になりきらない白だと思います（白）
- ・ どんな色をまぜても汚くならない、なんとなくあいまいな色が今の自分だと思ったから（黄色）

3-5. 多面性・可変性への言及

「多面性・可変性」とは、自分に多面性があり、時と場合によって変化することに言及したものである。記述の仕方によって大まかに分けると、“AもBも両方持ち合わせている自分,”“状況によって変化する自分,”“まわりに流されやすい自分”の3つに分けられた。全33件のうち、それぞれの代表的な例を挙げる。多面性を強調する人は虹色や複数の色を混ぜ合わせた色を挙げる人が多いのに対し、染まりやすさを強調する人は白やベージュを挙げるが多くなっていった。

< “AもBも両方持ち合わせている自分” の記述例 >

- ・ 一色では表すことができない。いろいろな面があるから (虹色)
- ・ 今の自分には赤のときと青のときがあると思う。赤は積極的で明るく、友人に対して思いやってみて話すとき。青は消極的で自分一人で考えこんで、暗くうつ状態になるとき。よって赤+青で紫を自分の色に例えた(紫)
- ・ 一色でも存在を示せるし、また二つの融合でもある緑。独立も融合も両方持ち合わせているような気がするので、緑にしました(緑)
- ・ 黒も白も合わせた色(灰色)

< “状況によって変化する自分” の記述例 >

- ・ 常に同じ自分ではないと思うから。学校で一人で授業を受けているとき、家に一人にいるときなどは暗いし、すごく考え事をよくして浮かない自分だと思えます。そんなときは色も暗めです。でも暗いときが常に同じ暗さではないです。外に出たときは、相手に不快な思いをさせたくないのもあって、明るくしているし、自然とそうなるし、です(カラフル)
- ・ 付き合う相手によって自分をこころこころ変えるから(虹色)
- ・ カメレオンがその場の状況に合わせて体の色を変化させるように、自分の感情がその場面場面で手に取るように変化しているのがわかるから(緑)
- ・ その時の状況によって人は変わると思うから、何色にもなれるという意味で白です(白)

< “まわりに流されやすい自分” の記述例 >

- ・ 他人の意見に流されやすいため、色を変えやすいと思ったから(白)
- ・ 染まりやすい。人の意見に流されやすい(白)
- ・ 自分の意見がなく、何でも周りに合わせてしまうから。相手によって何色にでも染まる(白か透明)
- ・ 人の話に合わせて意見を言うことが多いから(白)
- ・ けっこう染まりやすいから(白)
- ・ どんな色にも染められるし、どんな色とも合わせやすいから(白)
- ・ まわりになじむ色(まわりの人に合わせる)(ベージュ)

3-6. 外見とのギャップへの言及

「外見とのギャップ」とは、内面と外見のギャップに言及したものである。全3件のうち、2例を挙げる。

<外見とのギャップの記述例>

- ・ 一見、暖かい感じの色だけど、実際には暗くて（中略）私にはピッタリだと思ったから（ワインレッド）
- ・ しまりがなくふわふわしているけど、意外と頑固で他の色に染まりにくい、淡いのに実はしっかりしているから（ピンク）

考 察

まず、結果を整理する。自分を例える色としては白、ピンクが最も多く挙げられ、両者で全体の3割弱を占めていた。全16種類の色は多岐に渡っており、回答者の自己のとらえ方が多様であることが伺える。色の選択理由で最も多く挙げられたのは、自分の「個性」との関連であり、次が「好きでよく身につける」、「人からよく言われる」となっていた。「個性」の記述の仕方では、「具体的な特徴」への言及が最も多くなっていたが、「多面性・可変性」、「はっきりしない個性」への言及も比較的が多くなっていた。

ここでは、「個性」の記述の仕方を中心に、女子学生の自己に関する語りの特徴について考察する。その際、背景にある文化的スクリプトの影響や、青年期という発達段階との関連についても検討する。

1. 関係性志向

女子学生の自己の語りに見られる1つめの特徴は、関係性志向ということである。「多面性・可変性」(21.2%)、「はっきりしない個性」(16.0%)、「中庸」(3.8%)など、「個性」に関する記述の多くは、周囲との関係性・対照の中で自己をとらえていることを示していた。“状況によって変わる,” “人に合わせて変わる”といった記述はもちろんのこと、“白黒はっきりしない,” “目立たない”などのように、直接状況や他者に触れない記述であっても、周囲と比べて、あるいは周囲に身を置いた状況を想定しての回答とみなせるものが多かった。「はっきりした個性」(3.8%)も、反＝関係性とも言うべき内容になっているものの、他者存在を前提としているという点では共通していた。

上記の「個性」に関する記述に、他者からのフィードバックである「人からよく言われるから」(14.7%)というカテゴリーを合わせると、全体の約6割を占めていた(59.5%)。このことは、女子学生が他者との関係性の中で自己をとらえる傾向があることを示すものである。程度の差はあると思われるが、Markus & Kitayama (1991)の言う相互依存的自己観が、女子学生の中に内面化されていることの証左と言えるだろう。

また、同じように他者との関係性に言及する場合であっても、“流されやすい,” “周りに合わせてしまう”など、自分の弱さや被影響性を強調する語り口と、“いろんな人となじめる,” “状況に応じて様々に変化できる”など、自分の強さや適応力を強調した語り口とが見出された。

このように関係性を志向する語りが多く見られた背景には、課題の種類も影響していると思われる。

“色”をめぐっては、“合わせる”、“染める”、“混ぜる”といった言葉と一緒に使われることが多く、他との兼ね合いを前提にして使われたり、語られたりしやすいと言える。それゆえ、今回の調査において、他者との関わりへの言及が多くなった可能性もあるだろう。また、調査協力者が青年期の女性のみであったことも関係していると思われる。他の世代に比べて、大学生の自己概念は他者を手がかりとする傾向が強いこと(高田,2004)、男性に比べて女性のほうが関係志向的であること(Gilligan,1982)からすると、今回の調査では、関係志向的な傾向がより強く出た可能性がある。これらの点については、今後別の課題と組み合わせたり、男性にも協力を依頼するなどして確認していく必要があるだろう。

2. あいまいさ

個性について語る際の、2つめの特徴として挙げられるのは、自己の輪郭のあいまいさということである。もちろん、“おしゃべりだから”、“大人しいイメージがある”など、自己の「具体的な特徴」を挙げる学生も3割いたが、そこに共通した語り口は見出せなかった。これに対し、複数の人によって用いられた表現としては、“はっきりしない”、“どっちつかず”、“目立たない”、“AでもBでもない”などがあつた。いずれも否定形の表現であるが、あいまいさを強調していると言える。これらの表現を含む記述は「はっきりしない個性」に分類された。また、相反する側面を並べて、“AでもありBでもある”といった表現もしばしば用いられた。これらは、「多面性・可変性」に分類された。

「はっきりしない個性」を語るために使われた表現には、極端を避け、中庸をよしとする文化的スクリプト(Nisbett,2003)や、自分や身内を消極的に語るスクリプト(東,1994)が反映されているものと思われる。“出る杭は打たれる”ということわざにも見られるように、日本では突出しないことがよいとされている。個性の重視ということも言われてはいるものの、それ以上に“人並み感”(北山,1998)や“ふつう”(大橋・山口,2005)であることに価値が置かれていると言えるだろう。

さらに言えば、青年期という発達段階も関係している可能性がある。将来の道や目標を決めめぐねて模索している姿が、記述に反映されていると見ることもできるだろう(榎本,2002)。この点について検討するために、身近な年配の協力者(4名)に同じ課題を依頼したところ、次のような回答が得られた(下線は筆者による)。

- | |
|--|
| <p>Aさん(49歳,女性):“濃緑色ほど強い個性はないが、そこそこに自己主張は持ち合わせていると思うから。心の中の葛藤のしやすさは、中間色という濃淡が<u>どちらにも染まりやすい</u>という観点からもちょうど合ってる色かもしれない”(黄緑)</p> <p>Bさん(41歳,女性):“あまり周囲の人に影響されないと思うから”(黒)</p> <p>Cさん(54歳,女性):“結構他の人に染まりやすいところがあるので、<u>濃い色ではないが、白</u>というほどケツペキでもない。<u>暗くはないつもりだが、楽天的でもない</u>ので、暖色のイメージがなく、どこか頼りなげで自己主張が少ないので青系とした”(薄い水色)</p> <p>Dさん(57歳,女性):“特に際立った個性は自分にはないため。「この色」と断定できる色が見当たらない。白は好きな色でもあり、ある意味でいつも心を白紙にしておきたいという願望の現われでもある。無難・・・という心理的働きがあると思う”(白)</p> |
|--|

少数ながら記述内容は多様であり、女子学生の語り口と共通する表現（下線部）も見られた。発達段階の影響については、今後より多くの協力者に依頼して、検討を重ね、明らかにしていく必要がある。

また、“AでもBでもある”といった表現には、相反する側面をあわせもつ存在、単一の色には収まりきらない個性をもつことの強調が見られる。このことには、東洋人が論理的思考よりも弁証法的思考になじみやすい（北山，1998；Nisbett，2003）ことが関係していると思われる。米韓比較を行った研究によれば、アメリカ人に比べ、韓国人は自分の性格に相反する側面があることに同意する傾向が強いという（Nisbett，2003）。さらに、大江（1995）が述べているように、こうした二極性（ambiguity）には、日本の近代化の歴史そのものが反映されている可能性もある。これらの点についても、今後検討を重ねていく必要がある。

以上、女子学生の自己に関する語りについて検討を行ってきたが、方法論的にも多くの課題が残されている。今回の研究では、自由記述の内容を“語り”として分析したが、“語り”の内容は相手によっても変化する（榎本，2002；やまだ，2000）。不特定の人に向けた“語り”（記述）と、特定の人に対する“語り”とでは、語られる内容がどのように違ってくるのか、その点についても今後の課題としたい。

注

注1：selfの訳語としての「自己」と、日本語で日常的に使われる「自分」という概念は、必ずしも同義語ではない（北山，1998）。本稿では、それらの“語られ方”に焦点を当てているため、あえて両者の違いに踏み込まなかったが、いずれも“客観的に見た自己/自分の姿”として扱っている。

参考文献

- 東洋（1994）日本人のしつけと教育 東京大学出版会
- 東洋（1999）文化心理学の方法をめぐって - 媒介概念としての文化的スクリプト - 発達研究，14，113-120 .
- Bruner，J.（1990）*Acts of meaning*. Cambridge: Harvard University Press.（『意味の復権：フォーカサイコロジーに向けて』岡本夏木・仲渡一美・吉村啓子（訳），ミネルヴァ書房，1999年）
- Cousins，S. D.（1989）Culture and self-perception in Japan and the United States. *Journal of Personality and Social Psychology*, 56, 124-131.
- Diener，E., & Diener，M.（1995）Cross-cultural correlates of life satisfaction and self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 653-663.
- 榎本博明（1999）＜私＞の心理学的探求 - 物語としての自己の視点から - 有斐閣
- 榎本博明（2002）＜ほんとうの自分＞の作り方 - 自己物語の心理学 講談社現代新書

- 長島貞夫・藤原喜悦・原野広太郎・斎藤耕二・堀洋道(1967)自我と適応の関係についての研究(2)
Self-Differencialの作成 東京教育大学教育学部紀要, 13, 59-83.
- Gilligan, C. (1982) *In a Different Voice: Psychological Theory and Women's Development*.
Harvard University Press. (『もうひとつの声 - 男女の道德観のちがいと女性のアイデンティテ
ィ』岩尾寿美子(訳)川島書店, 1993年)
- Heine, S. J., Takata, T., & Lehman, D. R. (2000) Beyond self-presentation: Evidence for
self-criticism among Japanese. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 26, 71-78.
- James, W. (1892) *Psychology: Briefer Course*. Holt. (『心理学(下)』今田寛(訳)岩波書店, 1992
年)
- 梶田叡一(1980)自己意識の心理学 東京大学出版会
- 唐澤真弓(2001)日本人における自他の認識 - 自己批判バイアスと他者高揚バイアス - 心理学研究,
72, 195-203.
- 北山忍(1998)自己と感情:文化心理学による問いかけ 共立出版株式会社
- Markus, H. & Kitayama, S. (1991) Culture and the self: Implications for cognition, emotion
and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- 真島真里・東洋(1998)作文課題による目標構造と将来展望に関する研究 発達研究, 13, 106-118.
- McGuire, W.J. (1984) Search for the self: Going beyond self-esteem and the reactive self. In R. A.
Zucker, J. Aronoff, & A. I. Rabin(Eds.), *Personality and the prediction and behavior*. Academic
Press.
- Montemayor, R. & Eisen, M. (1977) The development of self-conception from childhood to
adolescence. *Developmental Psychology*, 13, 314-319.
- 向田久美子・東洋(2005)10年後の将来像:日中比較の中間報告, 発達研究, 19, 29-46.
- Nisbett, R. E. (2003) *The geography of thought*. NY: The Free Press. (『木を見る西洋人 森を
見る東洋人』村本由紀子(訳)ダイヤモンド社, 2004年)
- 大江健三郎(1995)あいまいな日本の私 岩波新書
- 大橋恵・山口勸(2005)「ふつうさ」の固有文化心理学的研究:人を形容する語としての「ふつう」
の望ましさについて 実験社会心理学研究, 44, 71-81.
- Shavelson, R. J., Hubner, J. J., & Stanton, G. C. (1976) Self-concept: Validation of construct
interpretations. *Review of Educational Research*, 46, 407-441.
- Schoeneman, T. (1981) Reports of the sources of self-knowledge. *Journal of Personality*, 49,
284-294.
- 高田利武(2004)「日本人らしさ」の発達社会心理学 - 自己・社会的比較・文化 - ナカニシヤ出版
- Triandis, H. C. (1989) The self and social behavior in differing cultural contexts. *Psychological
Review*, 96, 506-520.
- やまだようこ(2000)人生を物語ることの意味 ライフストーリーの心理学 やまだようこ編著
人生を物語る ミネルヴァ書房 1-38.

山本真理子・松井豊・山成由紀子(1982) 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究,30,64-68.

<謝 辞>

調査にご協力くださいました大学生のみなさんに心より感謝申し上げます。